



玉波書一函

乾



曾
775
/36



志哉一由程まともみことハア地むら宗ら
まれり時より大とく少く見ちしごとかきうなれ
そくにほさるる類み知あれいゆえおとら
こともあるたひなる下一うはさうゆかや心た
しく言はるかふ言ふ義直哉といてす男孤
とさめいひととさめい人孤ゆと一おわわけり
く一付て世の用とをとりそのねとらふは
えんよりほれた美とくなくたふはひねと
しくいふちあひいふくはあふれいあれ

成——くわいのり——元禄のはり器製契沖津彦

小玉透田
珠彦沙門

日本紀書稿の終りなり——免とくあつたの文
をゆくとられしちさう中——河社をおさるわ
路ありすりて戸別——せり去校合三とをを
してこゝにひいひりぬ河社にあらりの終りあり
さうりはなを——とらう——は作者のあひま
おこるあつちられた人のりこりこり——かゝるしつてかゝる
まめよちらやうなるの極にきりり——せりかゝるひ

あつちられたる延奉て唐のはり奇とらへとも撰集しつぬ
うきりの年う——くせりぬとま——ちりはうい
たよかりとて——に哉も——に河——もか——つちり
のやうにすあ——つ——この文にみるよちりうひ
あつちまうせとわかれにきりこりのこりこり
らをおとら——れたつちらなとち——とらり
好りの人のいん——益あがらう——とちちらうとく
あつちりの説い倒説をしてこりちらうとく——自
説とあつちらうとちひしてのしりよとちらうとちらり

やそくたし〜ゆいり〜の款もまきまわると年
山うらまき水戸無家
新介翁り〜るう〜ゆれ〜うたわ〜と
ゆれ〜る又たよめる人のちか前なりきういれ
と梓のせゆれい〜ゆい〜ま〜上あ〜の名を
きんちぬ人ともあり〜ゆゆれ〜をの末よま
ゆすおが〜心を〜ん人の板うつけておきよ
つ〜られてよわ〜り〜とひ〜う〜ゆ〜より洞
人女子わ〜紙はま在言并読〜ん〜ま〜
か〜い〜げん〜ま〜い〜ち〜の〜み〜あ〜い〜さ〜り

ういすそよ板はゆ〜れい〜お〜れい〜こ〜あ〜り〜と
ゆゆ〜ら〜てあらぬ人ち〜ありぬのち〜い〜い
い〜ま〜う〜ゆ〜き〜ま〜ん〜が〜い〜ゆ〜ゆ〜人〜さ〜ら〜て〜く
〜し〜た〜れ〜く〜す〜れ〜も〜も〜あ〜ら〜れ〜と〜ま〜が
ろ〜ゆ〜り〜と〜ひ〜き〜き〜〜よ〜こ〜い〜ま〜あ〜ん〜ん〜ゆ
た〜より〜て〜ゆ〜い〜ま〜う〜〜い〜ま〜あ〜ん〜ん〜ゆ〜ゆ〜い〜ゆ〜中
ら〜ひ〜ち〜〜ぬ〜い〜お〜り〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜

寛政九年正月
小澤無家

母子草
柿平氏
長柄橋
相坂意園
惟仁親王
初穂
十列馬
芭柳
韓紅地
垣電神
新名
中古利

惟喬親王
印杖
古之鳥
伯古彦伯古姫
多武尊墓
吾孫踏所及徳
淡名橋又人
遠山鏡
惠象地
祝場
末加夜木
夫祿乃能米

天那之古久依
鷲王名
落葉衣
舟形骨板

橋欵
玉柱
詩分後論をきうふ
思即尺のりれを出汁の

菊句
卷二
之れはくはふりて終りふ但於雅證
竹取物語

宇部月物語
法少納之
辛平六人集總論
新恒集
猿丸集

源氏物語
大和物語
人丸集
宗性集
家持集

東山集
敦克集
東文女詩集
無風集
小人君集
蕙感集
伊野集
元祐集
卷之三
賴基集
修明集
仲文集

蕙圃集
公忠集
清心集
乞則集
德宣集
贊之集
喉集
高克集
室之集
元善集
忠見集

中務集
神樂和物

篠
市張
深波
總角
淡田
弓左
弓
此目當在條次
下今誤載茲

宮人
階音取
殖擬
大宮
得錢子
朝倉

借馬樂
澤田川
夏川

言砂
貫河

四阿

飛鳥井

庭生

判根

大芥

安名尊

葦垣

河口

石河

卷四

万葉集より初撰の集りにてこれより二部

こゝにきぬい

之井

伊勢海

家門

曾子

何為

楳人

葛城

那波海

奥山

無力蝦

後撰集より〜以下万葉集の分

後撰

金紫

千載

新勅撰

続古今

続後拾遺

新万載

後撰集より万載集より万載汗

後撰

金紫

万載

拾遺

詞夷

新古今

続後撰

玉紫

風雅

続万載

拾遺

詞夷

朝評

月乃く

尾正あき

むらゝ枝

あやめやわさる

さねふさすふ

かれを

月やとー海あきのつー井と海人とあつーなる

さくら波

雪の夕々音

ふれあも

おれあつて

梅らね

嵐うわすじ

茶の露うふ

面は夕音

ぬねもさくん

病あはれこ

霧立の初音

雲あはれね

男さあ

おれあつて

さくらよの

そらね白き

昔ふたむし

梅ふーあき

おろろあはれ

枝よなふは

さねふさすふ

秋月あき

そらへの風

かきーの玉

梅打ーあつて

茶も幾への

茶の

月も露初

梅乃あつて

おれい入山

舌露のさけ

ゆらりいさあ

ほきあつてあ

羨やうり

山も初音

おのあつて

足せもあ

梅さくや戸

きれりしき
せ乃たき
あはれあや
あはれあや
あはれあや
あはれあや
あはれあや
あはれあや
あはれあや
あはれあや
あはれあや
あはれあや
あはれあや

あはれあや
あはれあや
あはれあや
あはれあや
あはれあや
あはれあや
あはれあや
あはれあや
あはれあや
あはれあや
あはれあや
あはれあや
あはれあや

あはれあや
あはれあや
あはれあや
あはれあや
あはれあや
あはれあや
あはれあや
あはれあや
あはれあや
あはれあや
あはれあや
あはれあや
あはれあや

あはれあや
あはれあや
あはれあや
あはれあや
あはれあや
あはれあや
あはれあや
あはれあや
あはれあや
あはれあや
あはれあや
あはれあや
あはれあや

芝五

呵耐

可紀見取

抄二卷

甲乙

いり紫

えもし

世名抄拾遺抄

後成心うさ

七夕乃前

百首前りし先

にし乃酒

きり山登

哥春

四心那

那摩

去雲

浮もし

魚もし

おもてうい

三日月乃前

歌合

時代乃しと紫

可紀親しむる

世名抄乃りあつて

志系忍系

園神

却にわし乃雁

そし乃う紙

葉門

あつて乃と紙

入白とあつて

不乃とあつて

有乃とあつて

とら乃とあつて

河瀬の山吹

あ乃乃紙

類の雜

源山

柳のし乃紙

老らくの意

教乃乃乃紙

内乃乃乃紙

新乃乃乃紙

空乃乃乃紙

信山

か乃乃乃紙

方乃乃乃紙

用乃乃乃紙

御向のてみ字

倉橋川菱

くまのてみ字

としま

二世山割

林松のれはり

ら十人ふれをたか人

菊乃平毛

津島のちや

富士分儀者

明日香宗女分

三々舞旋分

程とほはらふ分

うむれちくた

貫之分下分

あはぬの烟

益田池

名もたれ

磯島

夏集新古今集の分

菩提宗と雨やと分

松阿相名分

尾上宮

柳のいり

関乃とわりのまれ

重武と金菊の分

まぐやゆうた

急とゆを唐に入

草所秋道歌流

尾法う

あはれはは

にゆふ乃初

花の志とれ

紀西やちと人

とれはゆのやと

曉はらふとめ分

公宗と尊を分

手抄の産

切金乃を

撰集に入と分

入の分

か乃分

たあとの分

青の分

とらと

とらと

とらと

中分乃詞也亦とわんを終る

佛法傳

阿の佛

あゑう

あえも乃

あゝゝゑ

二十四番

天者葛

新田神 唐神

新勅撰集雜錄と雜部にとりて終る

羨歌歌水 日晏歌

歌乃季

天克の額

今古歌歌乃をひ

後者四社

吳桃

土田日記

河社目錄終

○河社むれく夏神楽の事者よりは道乃先達にあくは
りたのりなるをきりし物とて心持一貫之
歌集書に云天者二年うらたの世とて今夏り人
川社乃よりり人ほす衣つはほせとてあぬひりて
みまかれ一年三月うらたの風の色うらた
を門から

り水のうらた河社かて歌言くあそふたり
初の方新を今集神祇部より定むるに夏神楽乃
心とよむゆきとていれは時代をたひしれとまはる
風の介を夏神楽の人の心をきりてあはれくはよき
夏後乃繪夏からりたの河社をりては
六月後乃附むとて又右二をよむに六振を終る

今も我より四季のうらふ月おぼろにまみふたはけら
下く頼むのて神楽に入されも各の命をす終おぼ
地ふ帳よりれを河社系りて人々やそ神楽やそ世見舞集
あま水若ほよりふからうす終

みれうらうらうらわん言ゆく三河に
少少かこうのからうわりしう

これとあうはりて人とやそかううまめ終河社とを
庭敷式立月お終神楽よりん去神地祇ふかひみそおと
うけをうひ河乃瀬よまは瀬織津波詳やうあ終あう
ゆ終罪と大海の系にゆきて放たふううはくはゆあま
河系にうらうらとよん河とやそ河社とつあ終し
ひうた川中よあううめは社乃うは派引結ひ神位か

とと世あへて神詞やうとほあふ神あともうらうやあ
まうりう河す終とそ終に續物やう衣印と終はと小竹
ようりあてそれ麻乃終ととも水若あてまむ終と終
うれはうもあてあ終ううはうああはうあぬひあう
あとはうあ終や新拾遺とあ

和歌式部

今もあまをうらうらにうらうらうきうと

麻若をあち終神のそとあも

あうと月あてあううう又貴とあ

御福を系川乃終とれとわううああ

いもゆふとれたにあううあうら

わうあひもゆふとれ例乃神詞とれとあれと續物乃きあう

よきよりよき月一馬房は六月盡乃言は云

かきや一り舞とあはるやねり人りや

浪乃をぬゆふ風をきししよ

世に世に集とよくんたれりよききりやう川の
果茶抄神中抄と音者今に形帳乃言衣巻に河社
とよまれと難珠乃河茶信成御の判詞等
右義集一りみこりお右道中将資盛の言
お命に信成のうこ

六月雨を雪にりもちれと河や一り

いくたふも紙あ乃よゆすし舞

同心諸社百そに

はこれれいしれあらふもるに

河や一りよきあきあう有る

好の家は御乃河社とらあえきまへはあうと新
定められたる言を能得深集に信系極殿

春の信を志乃も衣とねりかけ

いくたゆすしんこのうくや戸

同系は信心ゆき

本一あぬらあもねりり河や一河

あのもちこころに六月ぬり法

風雅系は信心成實

かきや一りあ乃もあきこみ六月あ

衣ほすふひ戸やあうしん

壬二系に

河也一のほひや衣を名はして

ちまはあさぬりむうちりふ

おれみれ松かすらるるまはあつた

大井川うらぬるまはあつた

お川をさうりくちぬるまはあ

これも持統天皇の御所筑紫をまはるるまはあつた

波のまはるるまはあつた

お大僧正果守

うむせのまはあつた

ほきぬまはあつた

これら形物もまはあつた

かろくはまらりまはあつた

ふみ人あつた

お蔵川あつた

ゆめくちまはあつた

あれとあつた

まはあつた

○有接麻乃く馬房のつた

お山のまはあつた

これら舊事本紀第二云復令中臣祖天兒

屋根命忌部祖天太玉命而内拔天香山

之真牡鹿之肩拔而取天香山之天波波

迦而令台矣古事記就同此

よるまはあつた

くちわの... 和名鈔云
本草云櫻桃一名朱櫻 和名波々加一 乃木皮
延喜式云元年中御卜料 云巡波佐久良 波々加木皮
者仰大和國有封社令採進之 云

夜台問吾袖尔置白露乎
於公令視跡取者消管

は... 神代紀云天之瓊矛乃瓊の下に...

○

瓊玉也此曰勢... 同卷云妍哉可愛少男歎
古事記云阿那迦夜志愛上袁登古袁 此十字以音下御此
... 梅柳と楊柳... 同卷云高靴...

○

○

と柄小より人まゐれ
ちたとの急とまゝに 室や妙もたうもとあつと柄

○下巻云時味耜高彥根神光儀華艷映^{テリノ}于^{ラレンシク}

二丘二谷之間^ニ古名光儀とてとと照世は儀乃

字は之物とてとと万葉に此の字とてとととととと

ことかひし守とてとととととととととと

○垂仁紀云穴磯をあれしとととととととと

仁德紀云十四年冬十一月為橋於猪井^{ニレワタキ}

津即号其愛曰小橋古事記下仁德天皇

紀云又掘小橋江云云今小橋村を天皇守乃

少寅の方に當りて十町許ありむとてとととと

橋ありと掘小橋に松原村あり松耳はそとととと

○繼體紀も今乃本錯亂あり文の次とととととととと

とととととととととととととととととと

○崇峻紀昇衣指朴枝間とあふと今乃本えの

きぬとてとととととととととととととととととと

きぬとてとととととととととととととととととと

村名とて河内小湊河原今もありと物於守屋

連乃不順とてとととととととととととととととととと

みととととととととととととととととととと

○舊事本紀第三云天照太神高皇產靈尊

勅問諸神等曰昔遣天稚彥於葦原中國

至今所以久不來者蓋是國神有強禦之

者我亦遣何神問天稚彥還雷之所由也

とて雷大佐より孫に承りれき事とありし事とあり
今乃と文新畧に見しと初と雷大佐より出と
いひ傳へハ姫祖を奉る事と云はれ雷大佐は日中紀
少き事と云はれ神切を承紀に中佐鳥賊津臣と
いふ人と審神者と云はれふと云はれと仲哀天皇
時河原に塔人神儀と云はれ一と云はれ河内武
内者孫大佐と云はれ一と云はれ雷大佐と云はれ代の人
ありと云はれ一と鳥賊津と雷大佐と云はれ鳥賊津臣と
雷大佐といひせはれやといはれ神切紀に中佐鳥賊津
臣とあれと混と云はれ又大佐といはれ又と云はれ中
佐氏の中佐といはれと云はれと云はれと中佐と云はれ
中も日中紀事乃と云はれと云はれと云はれと云はれ

りたりと用たりと云はれ文德實錄第八云。齊衡三
年。九月庚戌宮主外從五位下。卜部雄貞
神祇少祐正六位上。卜部業基等賜姓占
部宿祢。あれと卜部乃と文字をいふ部少佐及先姓
とも者祢と云はれいふと云はれ卜部氏の嫡家なりと今
卜部と唐流あれと卜部乃と文字ともありと云はれ者祢
の尸とも賜りし寸は砂と云はれ拾遺乃と云はれ是久
元年神祇大副卜部兼基とありと新勅撰集にも
卜部兼基とありと云はれ日中紀奥書云。西母四年
二月大常卿卜部兼基とありと云はれ西母と云はれ唐流
御宇乃と云はれありと云はれと云はれと云はれ乃と云はれと
賜ひ

うてはふられ乃と新くまをなふ

風雅系雜

大申長世宣

雪の影うもは梅をねそとれや

あつまはくは昔乃くも

新法抄系雜

大申長世宣

力うかくゆりぬれをねと年とれく

海りねとまをなはりのひも

ト部氏の人のあま新初程と初て意出たかみそり

新法抄系雜

ト部意敷羽長

まゆきのとねもうすね危くぬく

それうらりりねくも川とね

同抄紙古回系

正之位意出

こまやせをとやまうりのをねね

終わう一回る抄系

おれ一葉の意出のあらきト部の意出とりこ

あれたねの戸と楊ととねも先程とくにはあらはれ

さうりたるる石富氏のやうとねと一葉もはあま

知く一のれとねの流とあまのひつあやまり花意人の

言家抄形ねは瑞乃を紫葉の成物にト部は思意

今乃齋たるこつとね家の意の字とれあて名のりあま

ねもらぬあやとねのあまの代實流の流ねら

あればねとらりあまの成流と人御冠あま乃流

とまて入麻とまされなるにみうとらりねと務是とあま

そは子孫とれいとねの字は字とたふらりあま

伊豆約してわたりてりやや何はけり
いそすまやうりたりん

○古事記序云亦於姓日下謂玖沙訶於
名帶宗謂多羅斯如此之類隨本不改

云云依まきまきとちりまきまきいひまきまき
とら波の遺跡や帯まきまきまきまきまき

○古事記中を急作云を修云之日予の地國
治をまきまきまきまきまきまきまき

故其天之日予持渡來物者玉津寶云
而珠二貫又振浪比禮比禮二字以切浪

比禮振風比禮切風比禮又與津鏡邊
津鏡并八種也此者伊豆志之故茲神之女

名伊豆志哀登賣神坐也故八十神雖欲
得是伊豆志哀登賣皆不得婚於是有一

神兄号秋山之下氷壯夫弟名春山之霞
壯夫故其兄謂其弟吾雖乞伊豆志哀登

賣不得婚汝得此孃子乎答曰易得也爾
其兄曰若汝有得此孃子者避上下衣服

量身高度而釀麴酒尔山河之物悉備設而
為宇禮豆玖云尔自宇至玖以爾其弟如兄

言其白其母即其母取布遲葛而布遲二
宿之間織縫衣禪及襪杏亦作弓矢令服

其衣服及弓矢悉成藤花於是其春山之
其衣服及弓矢悉成藤花於是其春山之

其衣服及弓矢悉成藤花於是其春山之

峨太皇太后崩。壬午葬太皇太后于
深谷山。遺令薄葬。不營山陵。先是民
問訛言云。今茲^{コレ}三月^{三月水原}日不可造^{多子}。齋以無
母子也。識者聞而惡之。至于三月。宮
車晏駕。是月亦有太后山陵之事。其
無母子。遂如訛言。此間田野有草。俗
名母子草。二月始生。莖葉白脆。每屬
三月三日。婦女採之。蒸擣以為齋。傳
為歲事。今年此草非不繁生。民之訛
言。天假其口。後拾遺集。佛語云。之末古
大臣のりしにゆりり人けしを思ふ人のひこむひ
ゆりり女のばやうくきりてしをりてつとあきよ

しくつこむれおしくひゆりりた二月三日かひき
ゆりり之末のしらひくくをてひきりりる

藤原実方物

みりり秋のしらひきりりわつり

きけきりりるるるるるるるるるるるる

莖も葉もおれのゆりりるるるるるるるるるるるる
くてまは葉もて末もてはひりりるるるるるるるる
かり和名鈔云本草云。菴蘆子^{上音菴和名}
今本草と考るるるる菴蘆子ハあゝハ葉鞠と
り草をりりるる菴蘆子の身ハ似てるるるるるるる
りりりりりりりりりりりりりりりりりりりりり
りりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりり
りりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりり

條乃りて其の事とありしとあり

○同第二云。嘉祥三年十一月甲戌朔
戊戌。惟仁親王為皇太子。策命曰。云云。
清和天皇これなるを推高親王と位ありし
と云ふは此の事なり。あやむくことと雖も
てうくありし

○同第三云。仁壽元年十一月甲午。取元
位源朝臣王正六位上。畧紀朝臣有常。畧中
柿本朝臣枝成。並叙從五位下。されども
柿本氏の人はも守入は極成といふも守人の
名は知らず。大氏紀小柿本は極成といふ人
とありて其の事とありしとありしとあり

○同第四云。仁壽二年春正月戊辰朔
己卯。諸衛府獻卯杖。逐精魅也。卯杖の
ころころなる

○同第五云。仁壽三年九月戊子朔戊
辰。攝津國奏言。長柄三國。兩河。湏年
橋梁斷絶。人馬不通。請准掘江川。置
二隻船以通濟渡。許之。橋ありし河あり
しとありし。長柄橋の事とありしとありし
といふ事ありしとありし

○同第六云。齊衡元年三月辛巳。有鳥
集殿前松樹。俗名古々鳥。其鳴自呼。
云云。鳥の鳴く事とありしとありし

○同第九云。天安元年。夏。四月。戊辰。朔。庚寅。始置近江國相坂。大石。龍華等。三處之關劉作授水府本。刻一分配國司健兒等鎮守之。唯相坂是古昔之舊關也。時屬聖運。不閉門鍵。出入無禁。年代久矣。而今國守正五位下紀朝臣今守上請加二處關。而更始置之也。お坂乃関を築ておれを修し桓武天皇良より移せしむをたすひて後乃ともやお昔し高岡といふ所を今良系よりり耐りの半やききし也

○同第十云。天安二年。二月。甲子。朔。己丑。在河内國。從五位下伯太彦伯太姬神。

並預官社。これに神名帳を考す。女高部あり。祥徳天皇神護帝雲四年三月に河内國中。義宮より幸す。しりり耐りお坂の所云。

多らも漸定さくりやりしとる河
十年をよりくとの所河川も

やうとくおりしりりかき

○三代實錄第一云。天皇諱惟仁。文德天皇之第四子也。母太皇太后藤原氏。太政大臣贈正一位良房朝臣之女也。嘉祥三年。歲在庚午。三月二十五日。癸卯。生天皇於太政大臣東京一條第。十一月二十五日。戊戌。立為皇太子。于時誕

騰躍加利一
本作騰加理
躍止利

育九月也。先是有童謡云。大枝乎超天
走超天一本无此三字走超天加利騰躍加利超天加利我耶護
留田耶阿左搜理阿左食無志岐耶推雄伊志
岐耶

識者以為大枝謂大兄也。是時文德天皇有
四皇子。第一惟喬親王。第二惟條親王。第三
惟彥親王。皇太子是第四皇子也。天意若曰
超三兄而立。故有此三超之謠焉。

ふれよふれよふれよふれよふれよふれよふれよ
平家物語の那知源平が事ありてふれよふれよ
史書乃明文と見えたりふれよふれよ

○同書小十陵口墓と奉新中少将を致したる一任
藤原朝臣後足多武尊墓。王太后國十市郡
と云ふことこれ推考と云ふ事不詳等と云ふ人
と事ありたる事なり。大織冠は今の傍友
知し今新傍友と云ふは法海云ふ事と云ふ武
多武尊墓は法海云ふ事なり。

○同第十八云。所鑄作之早穗二十文云云
これ抄より見ゆ。傍友と云ふは乃物と云ふ
に云ふ事なり。川筋と云ふは乃物と云ふ事
なり。傍友と云ふは乃物と云ふ事なり。傍
友と云ふは乃物と云ふ事なり。傍友と云
ふは乃物と云ふ事なり。傍友と云ふは乃
物と云ふ事なり。傍友と云ふは乃物と云
ふ事なり。傍友と云ふは乃物と云ふ事
なり。傍友と云ふは乃物と云ふ事なり。

○同第三十六云。元慶三年九月四日辛卯。令美濃信濃國以縣坂上岑為國堺。縣坂上岑在美濃國惠那郡與信濃國筑摩郡之間。兩國古來相爭境。未有可決。貞觀中。勅遣左馬權少允。從六位上。藤原朝臣正範。刑部少錄。從七位上。鞍負直繼雄等。與兩國司。臨地相定。正範等檢籍記云。吉籾小吉籾兩村。是惠那郡繪上鄉之地也。和銅六年七月。以美濃信濃兩國之堺。徑路險隘。往還甚難。仍通吉籾路。七年閏二月。賜美濃守。從四位下。笠朝臣。封邑七十戶。田六町。

續日本紀云
和銅六年七月
美濃信濃三
國之堺徑道
險阻往還艱
難仍通吉籾
路云云

少椽。正七位下。門部連御立。大目。從八位上。山口忌寸兄人。各進位階。以通吉籾路也。今此地去美濃國府。行程十餘日。於信濃國最為逼近。若為信濃地者。何令美濃國司遠入關通彼路哉。由是從正範所定。笠朝臣。封邑七十戶。田六町。續日本紀云。和銅六年七月。美濃信濃三國之堺。徑道險阻。往還艱難。仍通吉籾路。七年閏二月。賜美濃守。從四位下。笠朝臣。封邑七十戶。田六町。今此地去美濃國府。行程十餘日。於信濃國最為逼近。若為信濃地者。何令美濃國司遠入關通彼路哉。由是從正範所定。笠朝臣。封邑七十戶。田六町。

あまの万代の心幅とて陸・似る山・社なり
よんその氏人乃智とて毎年正月をえ百
より方乃同肉とくわとてかこくはりてま
いを國よりてはけし毎のくこれとゆれ
あまの海とれ一仁徳履中及正の之代乃
山陵の介あり

○延喜式主税上云陸奥畧祭鹽竈神料
一万束

○歌垣乃武烈紀云立歌場衆歌場北云
聖武紀云天平六年二月癸巳朔天皇御
朱雀門覽歌垣男廿二百四十餘人五品
已上有風流者皆交雜其中正四位下長

田王從四位下栗栖王門部王從五位下
野中王等為頭以本末唱和為難波曲倭
部曲淡茅原曲廣瀨曲八裳刺曲之音令
都中士女縱觀極觀而罷賜奏歌垣男女
等祿有差稱德紀云神護景雲四年寶龜元年
三月畧辛卯葛井船津文武生藏六氏男
女二百三十人供奉歌垣其服並著青摺
細布衣垂紅長紬男女相並分行徐進歌
曰乎止賣良尔乎止古多智蘊比布美奈
良須尔詩乃美夜古波與呂豆與乃美夜
其歌垣歌曰布智毛世毛伎與久佐夜氣
志波可多我波知止世乎萬知天須賣流

可波可母。每歌曲折。舉袂為節。其餘四首。並是古詩。不復煩載。時詔五位已上。內舍人及女孀。亦列其歌。垣中歌。數闋。訖。河內大夫。從四位上。藤原朝臣。雄四。麻呂已下。奏和儻。賜六氏歌。垣人。商布。二千段。綿五百屯。

○日本紀云。車形錦。菱形錦。霞錦。

○和名鈔。木部云。本草云。紫葳一名陵苕。

葳音威。苕音條。和名未加夜木。一云農世宇。蘓敬註云。一名凌霄。

いよは依乃宇是年とひる農世宇をひいあやふれねたるも昔の歌のいよはあは入わす孫

○同船具云。蔣勣切韻云。岸。音故和名由土利。洩舟

中水之斗也。唐韻云。洽。故緋反。漢語抄云。岸布奈由。一云容水。

水和物也。亦小ゆもさあはれもゆまかく物と

濟ちるとりともよも舟へもひるあはれり

○又云。周易註云。衣細。如余反。又奴下反。字亦作初。和名夫祢乃能米。所

以塞舟漏也。依。桶乃をくひにも能くもひる

たり能米をひひたへも能くもひる

○又云。釋藥性云。白薇。和名美那之古久依。一云久呂久依。一云阿未奈。松

造葉順長分にからるも物をもひひたへも

さき湯よひるもさき湯よひるも

さき湯よひるもさき湯よひるも

こまやまふれねたるも

○万葉集第六云。天平八年。冬十一月。左

大臣葛城王等賜姓橘氏之時御製歌一首

橘花者實左倍花左倍其葉左倍枝尔霜雖降益常葉之樹

此亦分級假名にかたがたての向にらとてをねとまは
りあふれ才口の向乃てを落向のけし先にくり
とあしそやはみとまふをまはらあつるまはら
とる花はうらまきまは

○管家万葉云

郭公鳴立春之山邊庭香直不輸入哉住瀝

物之切し郭公乃ま月ぬひそとらぬしそ世乃

ちたそとらむいふは沈むと金しそ川てのそふ
人よはと次とらふ標

○同集云

戀侘景緒谷不見之玉桂殊者根佐

倍丹掘手捐店

後遂丹何為與砥歟玉桂戀為留屋
門丹生增留籃

此二首は由極しあはれ月乃こもる

○同集云

秋之夜之月之影許曾自木間墮者
衣砥見江巨氣禮

之花分ほ撰集神中よそ秋乃かそそをねりみ人

あつたて下句ねらうもさかたにうりたれとあつて
あつたてかゝつた名にかせをさへあつたてうりたれ

○管家文草第二云。勸吟詩。寄紀秀才。

元慶以來。有識之士。或公或私。爭好論議。立義不堅。謂之癡鈍。其外只醉舞狂歌。罵辱凌轢而已。故製此篇。寄而勸之。

風情斷織壁池波。更恠通儒四面多。問
事人嫌心轉石。論經世貴口懸河。應醒
月下徒沈醉。擬噤花前獨放歌。他日不
愁詩興少。甚淡王澤復如何。これを淡論を
好むことと怪ひて詩にさうかひせしと紙をあらは
せしと云ふ多し又本朝文粹第一。聖廟傍
野大夫雜詩云。紀相公應煩劇務。自餘

時輩想鴻儒。この鴻儒とのをさふは上乃自注に
おれしくす二句のよき香ハ紀綱を乃延花の
詩序にも記さるり宋儒の詩乃唐よりもさふ
おれれりともさふを強論されたりゆえに
和分は丁に糸極其乃好むこととさうれく
よむをさういふことす

○圓覺經云。雲駛月運。舟行岸移。唐曹松
詩云。掬水疑山動。揚帆覺岸行。この下句
ねらつて終文よかたなり
土左日記よ

あきそゆく舟にこれそあひひふの
山さへり波ねをさうりや

世々にはよふ曹掾の詔を似る

○ 淡水のしくくふやにふれをねとれは灰汁の滓

ト馬ふく李徳裕の詩云愁衝毒霧逢蛇草

畏落沙蟲避燕泥
乃下句にかる處を離騷

云懲熱羹而吹整兮かき乃ちるんあは又

はてよかれいふ

○ 土左日記よからするのりやうくろつるのりした

をらぬぬをよするをういふ 菅野日記よ即事乃月

のまがふあの日あはるをみえつねはせんりあは

文綴り記よりいりういふ 菅野日記よ即事乃月

あきたんちんく人しくきういふ

○ 竹石物語は源氏よまねるうのいと記りしたるねや

よらるよまねるよあはいふく今きじういふ

竹石物語よいふあはいふく今きじういふ

とらうつよまの川のゆにほくひたり名をまきけ

おのまははあまあまいひひるまきけ中よあはい

系竹せんひとさちあはるりあはしういふ

えねはほの中ひらさうういふねはれとさす

うりなる人あはうつういふあはれりふ

やうわき物よあはいふく今きじういふ

よあはりぬあはいふく今きじういふ

よあはりぬあはいふく今きじういふ

やあはりぬあはいふく今きじういふ

さあらぬあはいふく今きじういふ

おきな竹と於い子とつけくのち竹とゆ
ゆ一紙をそととらたうぬあ竹と見はく
都くかさちりぬかくてたぬあうくゆふ
ちりゆくはらこや一ふあやたすきくと
あゆふあゆふ月とらうりあやとん
よさやとれ人ふあぬまいかあけかちう
しくあみあけうせきちや一のちうもさ
いさかしくよや一ふあやとんはらうか
ちうちうふとせんかくたうらとらふ
くひうらうらあけあけ代あくを
あない子とれいこ一きとやぬとら
しきゆたれくまみたりおふ竹と

と久一くちうとらうりあゆふのちやあゆ
ぬきと若とむらくむ入あふとむして
けさいあふくあ竹のかくやひ光とけけ
けわとら日うらあけあふふらつ乃あうひ
う一とらきお竹とらと名付きたるハ万紫系
才十六云竹取翁偶逢九箇神女贖近
押之罪作歌昔有老翁號曰竹取翁也
此翁季春之月登丘遠望忽值煮羹之
九箇女子也百嬌無儔花容無匹云云
け竹たはたうりむと若ハけうりくま
ねえまふこれとらと名付きたるハ万紫系
六百番分合乃附いたのけとをうらとら

史記趙世家曰。知伯怒。遂率韓魏攻趙。趙襄子懼。乃奔保晉陽。原過從。後至於王澤。見三人。自帶以上可見。自帶以下不可見。與原過竹。二節莫通曰。為我。以是遺趙母。卹原過。既至。以告襄子。襄子齋三日。親自剖竹。有朱書曰。趙毋卹。余霍泰山山陽侯天使也。云云。竹中。ほをかく。竹中。もあう。りる。智度論第十云。谷曰。罽真珠。出魚腹中。竹中。蛇胆中。あまこ。竹に。ま珠。あ。蛇。た。かく。や。む。え。た。名。は。古。事。記。出。仁。天。皇。段。云。又。娶。大。筒。木。岳。根。王。之。女。迦。具。夜。比。賣。生。御。子。袁。邪。弁。王。これ。と。か。ま。た。は。近。かく。や。む。え。と。ひ。

とけ。る。人。の。中。の。ひ。り。人。の。お。お。網。と。あ。や。は。又。武。王。の。お。ゆ。代。乃。皆。た。ま。は。大。伴。有。孫。沖。行。は。と。り。人。の。お。ゆ。五。人。の。人。く。に。か。や。姫。得。た。は。た。物。と。い。ふ。は。詩。曰。由。醉。之。言。俾。出。童。殺。註。曰。童。殺。無。角。之。殺。羊。必。無。之。物。也。史記封禪書曰。齊桓公既霸。會諸侯於葵丘。而欲封禪。管仲曰。畧。於。是。管。仲。賭。桓。公。不。可。窮。以。辭。因。設。之。以。事。曰。古。之。封。禪。部。上。之。泰。北。里。之。禾。索。隱。曰。韋。昭。曰。設。所以。為。盛。江。淮。之。間。一。第。三。脊。所。以。為。藉。也。東。海。致。比。目。之。魚。西。海。致。比。翼。之。鳥。云。於。是。桓。公。乃。止。又。刺。容。傳。荆。軻。贊。索。隱。曰。燕。丹。求。歸。秦。王。曰。

烏頭白馬生角乃許耳丹乃仰天歎烏頭
即白馬亦生角風俗通及論衡皆有此說
仍云鹿門木馬生肉足也之乃をさひたり
あやひひあけすおられたりと云和名鈔
造作具部云辨色立成云麻柱阿奈比三代
實錄第三十八云元年十二月四日大天
基經とを改むと云々安奈比安奈比奉母久奈利とあれはひ
少ふたつにをのけりし佛乃御衣のそらと
西域記云波刺斯國釋伽佛鉢在此王
宮南山住持感應傳云世尊初成道時四
天王奉佛石鉢唯世尊得用餘人不能持

如來滅度後安鷲山與白毫光共為利益
曰天主た乃くひと川の所ををりて佛
と川をわねくわしていと川を急をまて
蓮葉乃山乃む乃移るうけ物終出ゆつりのをた
たたね及たほひあうみさとして得うらぬ乃山の
あさほあえのそらにをかくりよるひとわれり
山はくろいりあうくのみかあをせき記との
との依にらよてつらむ乃えをさるをさる又進
に海遊となすのそらと恐を深く杯をさるのそら
吳錄云日南北景縣有火鼠取毛為布燒
之而精名火浣布搜神記云崑崙之墟地
首也。是惟帝之下都故其外絕以弱水之

吳錄三十卷
張勅撰見宋
鄭樵通史統
文畧
本邦此書今
既不見不可

校訂也入江
昌熹引詩珍
之說云火鼠
出西域及南
海火州其山
有野火春疾
生秋冬死鼠
產其中甚大
其毛及艸木
之皮皆可織
布汚則燒之
即潔名火泥
布云是
待異錄而可
以為證也云
云

深。又環以炎火之山。山上有鳥獸艸木皆
生。育滋長。炎火之中。故有火澣布。非此山
草木之皮象。則其鳥獸之毛也。漢世西域
舊獻此布。中間久絕。至魏初時。人疑其無
有。文帝以為火性酷烈。無含生之氣。著之
典論。明其不然之事。絕智者之聽。中其刊
百十廟門之外。及大學與石經。竝以永示
來世。至是西域使入獻火浣布。架波於是
刊滅此論。付之史記。三代
世表第一云。詩傳曰。湯之先為契。無父而
生。契母與姊妹浴於玄丘水。有燕銜卵墮
之。契母得。故含之。誤吞之。即生契。
索隱曰。按史
所引出詩傳。

故曰詩傳。殷本紀云。玄鳥翔水
遺卵。城簡狄取而吞之。
契生而賢。堯立為司
徒。姓之曰子氏。子者茲。茲益大也。詩人美
而頌之曰。殷社土。芒芒天命。玄鳥降而
生商。商者質。殷號也。夫人之有。惟此。其
女山乃中。り。おきく。あ。の。子。お。れ。ま。を。物。て
あ。い。く。あ。り。と。く。と。は。あ。れ。と。孫。の。海。津。の。あ。い
ま。い。と。あ。ま。い。の。あ。ま。い。と。あ。い。ま。い。と。あ。い。ま。い。と。
あ。い。ま。い。と。あ。い。ま。い。と。あ。い。ま。い。と。あ。い。ま。い。と。

と待天保六年を去月言より以代船程麻の
山中くく多岐路一の言ふ事一年ぬ

中村直道

○うは月物程云あつとてさよりくねまをゆく
吾次郡すゆ一いつきうねみの一の上たゆを
ね一ゆきや一なまふま。今もかゝ紙あらふを女
洞はゆく一まきほをいよもさあは 回らせん乃
ねひのまをさくろふのれをゆきみふつとせりて
よわ積りとおやもゆいさな人ほといあんさうい
しねなひいとか一さまらけ 回らるやうなびら
うらりりたり人をゆ一うまふ人もさきまけ
乃上紙をいふねま 回らり乃上紙まきねて
よひねさうせん まき 回らるくさく
これまゆいさうま まき あらうららねふうらな
ゆく一尾玉まきまのまうらけ 回らり入まふ

ふーんふーんふーんふーんふーんふーんふーんふーん

金紫系六

藤系成通親后

水戸うへへあけけけけけけけけけけけけけ

きんぎょやうれやうれやうれやうれやうれやうれ

うれえたのうううううううううううううう

ううううううううううううううううううう

ううううううううううううううううううう

回添やねい山たいらうらうらうらうらうらうら

うらうらうらうらうらうらうらうらうらうらう

てちんてんてんてんてんてんてんてんてんてん

けおちんてんてんてんてんてんてんてんてん

みおれーあぬ人やーあぬ人やーあぬ人やーあぬ

すくすくすくすく

河原系六

和系成部

あーれえおのぬ山うううううううううう

あおあおあおあおあおあおあおあおあおあ

回ひおてててててててててててててててて

からまわらうらうらうらうらうらうらうらう

あつぬあつぬあつぬあつぬあつぬあつぬあつ

山あーまあたのまーまーまーまーまーまーまー

おくのねひやーゆーゆーゆーゆーゆーゆーゆー

まうれひーてててててててててててててて

回けくーあうらうらうらうらうらうらうらう

うなけけー回れ人うのいーあひあひあひあひ

れきり六帖并今乃かを考られりたれりし一
同友東乃也

ふいふやわらう人のふふたうたふいふはふいふふいふ
回糸の使

あふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ
初の方は折と葉と葉と葉と葉のきやふふふふふ

○ 源氏物語のふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ
あふ

あふのむふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ
ふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ
ふふふふふふ

玉葉集者下

行恒

玉葉集者下

あふのむふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ

ふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ

ふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ
目とふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ

ふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ
揚名介あると揚名目あるとこれあふふふふふふふ揚名
守とふふふふふふ揚名掾あるとあふふふ揚名とふふふ
今のせうふふふふからあふふふふふふふふふふふふふ
ふふふふふふふふふふふふ

ふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ
ふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ
ふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ

ふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ
ふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ

中畧

するに

○ 法少納之に俄通乃津はるはかたはるをいふなりと
木のりやと名はるくもその位はるる 雜寶藏
經第一云。始佛言過去久遠有國名棄
老。彼國土中有老人者。皆遠驅棄。有一
大臣。其父年老。依如國法。應在驅遣。大
臣孝順。心所不忍。乃深掘地。作一密屋。
置父著中。隨時孝養。爾時天神捉持。二
蛇著王殿上。而作是言。若別雄雌。汝國
得安。若不別者。汝身及國七日之後。悉
當覆滅。王聞是已。心懷懊惱。即與羣臣
參議斯事。各自陳謝。稱不能別。即募國

界誰能別者。厚加爵賞。大臣歸家。往問
其父。父答子言。此事易別。以細粟。物停
蛇著上。其躁嬈者。當知是雄。住不動者。
當知是雌。即如其言。果別雄雌。天神
又以一梅檀木。方之正等。又復問言。何
者是頭。若臣智力無能答者。臣又問父。
父答言。易知。放著水中。根者必沉。尾者
必舉。即以其言。用答天神。天神歡喜。
大遺國王。珍奇財寶。而語王言。汝今國
土。我當擁護。令諸外敵。不能侵害。王聞
是已。極大踊悅。而問臣言。為是自知。有
人教汝。賴汝大智。國土獲安。既得珍寶。

又許擁護。是汝之力。臣臣答王言。非臣之智。願施無畏。乃敢具陳。王言。設汝今有萬死之罪。猶尚不問。况小罪過。臣自王言。國有制令。不聽養老。臣有老父。不忝遺棄。冒犯王法。藏著地中。臣來應答。盡是父智。非臣之力。唯願大王一切國土。還聽養老。王即歎美。心生喜悅。奉養臣父。尊以為師。濟我國家一切人命。如此利益。非我所知。即使宣令。普告天下。不聽棄老。仰令奉養。終 乃乃法也。ぬり終は林氏のわりの文とひりり中なり。るれとこころいす代らるるは國老ら

人とそそれをふくねたすて近清府とれなり。はのしそをねるるあられいりせえり物以をそねるるかろるる。 戰國策云。齊襄王卒。子建立。后事秦。謹與諸侯信。以故建立四十餘年。不受兵。始皇嘗使使者遺后玉。連環曰。齊多知。解此環。不。后以示羣臣。群臣不知解。后引錐。推破之。謝秦使曰。謹以解矣。敏達紀云。又高麗上表。疏書于烏羽。字隨羽。黑。既無識者。王辰尔乃蒸羽於飯。氣以帛印羽。悉寫其字。朝廷悉異之。これ似るるは。同篇とつるるは。解るるる。いりるる。いりるる。いりるる。

よから教を為派の母とてこと草とていふ事あり
同佛眼乃高きとて此の西にあるもの経法を論祇経
とていふりこれに秘密の中の内極秘法経行して供子
のきやとておんまきめとてさう教行ありてはたねう
秘密乃經軌ハ結文と爲す一と目一ハすたにむとを
沙のきとて越之秘耶とて極意飛たると源氏物語爲
空にありし一とてに公衆のさやのりをきふとむ
らんの時やきとてたかきとてむとてこれとてひらめ
うとてつり信とてさう結文は極とて極の事とてむ
それとては派ありとてありたれはたのいとはむとて
とてみぬを架れとてさういふ事やむ法とては秘意の
高きとて派補とてはとて論祇経にありとては別乃

經つてきとて甚深なりとていふ事ありとて
中とてつくとて教とてハ極意子の奥とてさうとてかきり
とて一教眼とて奥意抄とて後派とてこれをとて
らありとてにささた人ありとてこれとてさうとてはた
とてさうとてはた物ありとて極意とてさうとてありとて
とてありとては

○ 大和物語に

大和の比叡水とては極意とて何とてさうとてはさうとて
いさうとてさうとていさうとていさうとてさうとてはさうとて
おほきとては河とてこれありとて神代紀上に神性とていさう
おほきとては姓の字ありとて極意とてさうとてはさうとて
同意ありとて極意とてさうとては極意とて命婦にありとて

うづかぬにまゝに人よるの
石貝つらねるをうづかぬ

沖波のうづかぬは波の名ありや
なほなほ我まはまゝにうづかぬ
れ一吹波のうづかぬは波の名あり
うづかぬはまゝにうづかぬ

大波風あちひりうづかぬはまゝにうづかぬ

あちひりうづかぬはまゝにうづかぬ

回言子乃門よりうづかぬのうづかぬはまゝにうづかぬ
うづかぬ

あちひりうづかぬはまゝにうづかぬ
あちひりうづかぬはまゝにうづかぬ
あちひりうづかぬはまゝにうづかぬ
あちひりうづかぬはまゝにうづかぬ

ありてあちひりうづかぬはまゝにうづかぬ
ありてあちひりうづかぬはまゝにうづかぬ

回言子乃門よりうづかぬのうづかぬはまゝにうづかぬ

あちひりうづかぬはまゝにうづかぬ
あちひりうづかぬはまゝにうづかぬ

あちひりうづかぬはまゝにうづかぬ
あちひりうづかぬはまゝにうづかぬ

回

あちひりうづかぬはまゝにうづかぬ
あちひりうづかぬはまゝにうづかぬ

あちひりうづかぬはまゝにうづかぬ
あちひりうづかぬはまゝにうづかぬ
あちひりうづかぬはまゝにうづかぬ
あちひりうづかぬはまゝにうづかぬ

沖野と申て葉と云は沖野といふ事なりかきほせられ
しことと葉俊等の下に葉と云は沖野といふ事なり
と云れし事か一りし事なりと云ふ事なり
と云ふ事なり仁徳紀に葉此云箇やほせられし事
葉と云は一りし事なりと云ふ事なり一りし事なり
國ゆつり乃をた

おひとさとのか一りし事なりと云ふ事
あはららしことかろふ事なり

此のりりし事と云は葉と云は沖野といふ事なりと云ふ事
りし事なり

同
くりし事なりと云は葉と云は沖野といふ事なりと云ふ事

六帖に云はれし事なりと云は沖野といふ事なりと云ふ事
と云ふ事なりと云は沖野といふ事なりと云ふ事
と云ふ事なりと云は沖野といふ事なりと云ふ事
と云ふ事なりと云は沖野といふ事なりと云ふ事
と云ふ事なりと云は沖野といふ事なりと云ふ事

おはららしことかろふ事なり
と云ふ事なりと云は沖野といふ事なりと云ふ事

と云ふ事なりと云は沖野といふ事なりと云ふ事
と云ふ事なりと云は沖野といふ事なりと云ふ事
と云ふ事なりと云は沖野といふ事なりと云ふ事

おはららしことかろふ事なり
と云ふ事なりと云は沖野といふ事なりと云ふ事

同
と云ふ事なりと云は沖野といふ事なりと云ふ事
と云ふ事なりと云は沖野といふ事なりと云ふ事
と云ふ事なりと云は沖野といふ事なりと云ふ事

万葉集卷第十

あきれく草花うへにくたゝの

消えともはとひし一君とも

回あふとれくはまのさりとてこれとあゝぬ女乃

手とくくくありと えんげまのけしきとまきとけい

わたりてきりあふ 中興うきりうてうきありと

いけ急物来たあこれとさところあふあふは

はらりてとて一君とわかれ先とありは

回りをたにやうくをさひひる人あけ人とよひ

言わくをさうりて

かたれぬのうこはみふれあこれぬあひらうり

うく女

みくられはからりりの下草いあうりうまのゆめ

伊勢歌集に初乃あそ人とあつてはし乃後句なく

れぬうくと初乃我集忘し初乃あはれを居て

と源白まひしうりうりうりうりハ伊勢うり伊

勢集うりて裁く道

同

君うま衣はをたわじはなれくあつたあ集う

はあ伊勢集に集者初し傷心遍集うりれとつハ

はとて活人あ知と裁りはまのたにわくはあ

よあてとて

○二十六人集

万葉集うき古今うき後撰うき初集うきあひり

大細を心任じしそらありむ川つら入致ぬき
てふれりききんそふかそらあまういそらわき
いしき

ふつふあつたさるもあつたは人つら河のいそあり
貫し集わしのでうふつふあつたをたはた
れふゆあふらんおわはるなむこせきしははゆ
しとほあつたはたはらういふらうらあ
は又藤秀春撰為自文棟梁え方子里深表
又忠房等と除こられ及まきほの信長を
くられおれおわおわつれこれおれら
うら

○人まらの素と切ふは作かま物らむいひ

万葉集の中よりぬしあぬこをぬきと
ふ十とく紙物りぬしおれはことしに用ふ
ぬりのちりさふにふのそとと延永三層の
信長はあまこらぬ

ゆらぬおやうんひのち中集をうらひ
おれおれ素の物もやまをけいし

あかおれは入江のうらをたみさたあやう
はしを新た今集新入れそ入るお集らん
るまうへしはらふをうらたかくせれたうら
いしき

そのゆらむはたはたはらういそら
そらりは和名鈔云續搜神記云舞友小時家

貧賤常照射見二白鹿射中之明晨尋蹤
血矣。今按俗云照射止 いたもかたうふを尸洞や
毛之蹤血波加利
肥た乃をたをた尸をたをとうけを向う記

○祈恒集

久しうぬ人を多川やあえぬおを無れ急い故ゆる
これと待と杉よを松あやうねんとい記

かくわあふ人いじりあう泥やとらぬるそのた神といや
ちとらめはありあ津りのたた

茶乃をいあうかきあめはひも扱あふまひれ
か物のもよおれあうこ卒いつうをたたた

立ゆりふもるさるむねとれを山川乃所
新古今集に 俊成

まうのこをいひてきそきしを招しつや
そよまのくゆや故よあうをれ

ちうら河よりふお何とい記

お海おのた河を竹川の淵たみうもきうりの学
おれを初と集といよりけを竹川と河内なりといふ
流あましく伊勢ありと河をたか一年 十五 徳儀 伊
勢乃をいあひのいさしふくしくお名河たあうてん
かをせぬ入は山原風のあうりあうりうたをすう山
たてき川をいひてかちて次よまといふあうあふ
流くを川をいひて又竹川の流たいさしひ
らう川をいひて長流ああれいさふさ知し
又順家系に貞元元年初東の信乃なりや

ねとすかあひふふ月正有庚申秋入くまわさあ
ひてあそやういしひのんを

後注下日
神代々々色もろりくぬ竹川川竹

後注下日
よくとそあそをかうへわさるん

和名抄云。多氣郡。多氣介。延喜式云。多氣
大興禰神社。かれを東宮の御とをたけの
えのあそりにをろね川あそは禰也。禰もかく
をよとれらあり。禰乃分竹川のとりんねと末
の系。河竹乃とみて。禰をわらひをさ
ゆぬありと。ははら。ゆ。う。つ。き。ね。近
か。の。ね。乃。も。あ。り。禰。乃。ハ。河。と。う。あ。り。ね。と。を。と。り。
新編撰系

康資王母

ややききふさ禰乃やこれさ

かきやあそまらうゆらん

よまにさう〜又さ之集ん

あそいささ草乃まらうともさそねハ

あああう〜さそあもみえをれ

○ 系撰系

大屠乃みりさあせをひて河内山にやあゆを
にまうりゆん〜ゆをたひさうさ
うあさかとう〜あさう〜さそをたふた

聴りてわ〜さそあにひり〜さう〜あさあさあ
ハ大屠のさうりさあせ〜さあひて〜あそハ神代お遠
さうり〜さあ〜あさあ〜あそあ〜あさあ〜あさあ

この良國流るれを良國と和訓してはけさそ
あひてその心をよき事なかりて今ありし事なれあ
法心より一にたれしとておしよる万葉集に
あひしとてあれしとてりて名はるる人れといふ
うしとておしよる心とてりて名はるる人れといふ
もりの海なる國なるをたれしとて紙あひてとてし
ふりしとてりてあれしとてりて名はるる人れといふ
あまのりともてりしとてりて名はるる人れといふ
信らねははるしとてりしとてりて名はるる人れといふ
もとらねしとてりしとてりて名はるる人れといふ

やあつじ橋のやねなる子のらうしとてりて名はるる人れといふ
これとてりしとてりしとてりて名はるる人れといふ

これとてりしとてりしとてりて名はるる人れといふ
神名帳云大和國宇陀郡八咫鳥神社鞆
これとてりしとてりしとてりて名はるる人れといふ
天皇謚神武欲向中洲之時山中嶮絶跋
涉失路於是神魂命孫鴨建津身之命化
如大鳥翅飛奉導遂達中洲時天皇喜其
有切特厚褒賞八咫鳥之號從此始也これ
より終る賀茂建角身命山城山愛宕郡
久我神社同郡之井神社小として賀茂別當命
乃卯社又のこはゆり乃乃社はこれとてりしとてりて名はるる人れといふ
りしとてりしとてりしとてりて名はるる人れといふ

○ 猿丸女史集

志はあつひにほれき時ちわつと川わひさうりうは
 卯をほふふと月の月清にねほけしやわむとくま
 わきも子うきしはあけいへんはつねの卯をやとに
 はあは初ねをせつと初と載とねを 紙影集にあつて

夏山初ねをたると川を初とてさうむの声はそそけは
 川島まふふふあけねほくれあつくとあはなやとえ
 君とあつひに初とねあつて郭とあつてとあつてたつと
 家右のあつてとあつてとあつてとあつてとあつてと
 川を今解くとあつてとあつてとあつてとあつてと
 秋のあつてとあつてとあつてとあつてとあつてと
 ありとあつてとあつてとあつてとあつてとあつてと
 かくとあつてとあつてとあつてとあつてとあつてと

初とあつてとあつてとあつてとあつてとあつてと
 天河あつてとあつてとあつてとあつてとあつてと
 志とあつてとあつてとあつてとあつてとあつてと
 君とあつてとあつてとあつてとあつてとあつてと
 銀河あつてとあつてとあつてとあつてとあつてと
 天川あつてとあつてとあつてとあつてとあつてと
 一年にあつてとあつてとあつてとあつてとあつてと
 志とあつてとあつてとあつてとあつてとあつてと
 初とあつてとあつてとあつてとあつてとあつてと
 天川あつてとあつてとあつてとあつてとあつてと
 秋風あつてとあつてとあつてとあつてとあつてと
 初とあつてとあつてとあつてとあつてとあつてと

いふ物さうりやうさうえんを糸いさういふ物さうい
てらこねをあらわすさういひさう

むつしよもゆいひさそい別りい人のあひいあつさやう
あれいむいさう糸琴はさそいよみさういさ

○公忠集

えらみいさういさういさういさういさういさうい
日々此に不償とも不肖とも不敏不慮なともかまそ
みかたされいさういさういさういさういさうい
いふも智恵なりさういさういさういさうい

まらりてほに信ぬ糸梅をうひゆさふに當たさうい

○宗公女清集

うらにれをさうい時いれあさひい糸乃ゆいさうい

清女に依とゆてあひてゆいさうい

さういさういさういさういさういさういさうい

女乃々々

津代もあさういさういさういさういさうい
れさういれ社のまへのあにね糸乃ゆいさうい

風さうい津のあさういさういさういさういさうい
ひかあさひ物いさういさういさういさうい

○清心集

いさういさういさういさういさういさうい
糸のあさういさういさういさうい

さういさういさういさういさういさうい
大層うい何の中文のあ命さういさういさうい

一してはらりていそはらりいそはらりいそはらりいそはらり
はらりいそはらり

世人のよきいそはらりいそはらりいそはらりいそはらり
いそはらりいそはらりいそはらりいそはらりいそはらり
いそはらりいそはらりいそはらりいそはらり

天曆法製

世人のよきいそはらりいそはらりいそはらりいそはらり

○ 奥風集

山風乃むねはらりいそはらりいそはらりいそはらり
山風乃むねはらりいそはらりいそはらりいそはらり
初乃いそはらりいそはらりいそはらりいそはらり
夜乃いそはらり

為こなたをいそはらりいそはらりいそはらりいそはらり
あつたてこのいそはらりいそはらりいそはらりいそはらり
春は月の光とをいそはらりいそはらりいそはらり
いそはらりいそはらりいそはらりいそはらりいそはらり
いそはらりいそはらりいそはらりいそはらりいそはらり
時。到。足。柄。之。坂。本。於。食。御。糧。處。其。坂。神。化。白
鹿。來。立。尔。即。以。其。昨。遺。之。絲。片。端。待。打。者。中
其。目。乃。打。殺。也。故。登。立。其。坂。三。歎。詔。曰。何。豆
麻。波。夜。自。河。下。五。故。号。其。國。謂。何。豆。麻。也。且。中
紀。に。是。上。野。雅。日。山。小。乃。り。て。衣。葉。も。や。いそはらり
いそはらりいそはらりいそはらりいそはらりいそはらり

わつよせいりくわらう

○ 是別集

わつよせいりくわらうのあはれゆゑ海をうらみかつよせいりく
なまこい紙の巻をいしうらみは巻をうらみは伊勢の
海河あつよせいりくわらうのあはれゆゑ海をうらみ
ふたつ海をうらみはうらみ

○ 小大巻集

信濃中のや後のあはれゆゑ海をうらみはうらみは伊勢の
信濃中を武蔵のあはれゆゑ海をうらみは伊勢のあはれ
ひらり巻をうらみは伊勢のあはれゆゑ海をうらみは伊勢の
あはれゆゑ海をうらみは伊勢のあはれゆゑ海をうらみは伊勢の
あはれゆゑ海をうらみは伊勢のあはれゆゑ海をうらみは伊勢の

あはれゆゑ海をうらみは伊勢のあはれゆゑ海をうらみは伊勢の
あはれゆゑ海をうらみは伊勢のあはれゆゑ海をうらみは伊勢の

あはれゆゑ海をうらみは伊勢のあはれゆゑ海をうらみは伊勢の
あはれゆゑ海をうらみは伊勢のあはれゆゑ海をうらみは伊勢の
あはれゆゑ海をうらみは伊勢のあはれゆゑ海をうらみは伊勢の
あはれゆゑ海をうらみは伊勢のあはれゆゑ海をうらみは伊勢の
あはれゆゑ海をうらみは伊勢のあはれゆゑ海をうらみは伊勢の

大井川より中井川

あはれゆゑ海をうらみは伊勢のあはれゆゑ海をうらみは伊勢の
あはれゆゑ海をうらみは伊勢のあはれゆゑ海をうらみは伊勢の

清くも大なるをたさくえりては月原部公乃
声とあそりそりそりそりそりそりそり
たすひにたれいきこけり

初戸部部一帯をきくはるのぬら地社を
百紫系中十九云

はね人もねぶつこきこをてきき
けあつてきききききききききききき

これおしききけこあこあおてけきり

○新宣集

屏風前 あ戸部一帯をきくはるのぬら地社を
たすひにたれいきこけり
初戸部部一帯をきくはるのぬら地社を
百紫系中十九云

けあつてきききききききききききき

ここれつとあつてきききききききききききき
たすひにたれいきこけり
初戸部部一帯をきくはるのぬら地社を
百紫系中十九云

○美盛集

初戸部部一帯をきくはるのぬら地社を
百紫系中十九云

たすひにたれいきこけり
初戸部部一帯をきくはるのぬら地社を
百紫系中十九云

あつてきききききききききききき

右二そ似てた作なり

深はむらさ
万水三河を
これにハル
集作主三集
源氏権三に
今葉胡強集
みされをハ
板小も言三集
しを三言
聖書集集
三言今を
四の柄はは
より三言
源氏んし
方のみ

二葉より今あらむねのひらきをうらむにひとくわ
源氏の相持にきたりて後まねるよりねのよき
もそよほしれくつて源はゆに台板より
高しひねち向りて川のねをこき
いっしめとやあらんこき
こりてしれと今のしれは
あゆむてあまきわらふねのねをうらむ
家さひいにれお刺の釣もやうけしひらね
はくねれねるひらぬ川うらむひらね
右にそ後のすはらひつたね約とくうら
年とねはけもつてねのねをうらむ
人業今分

夫木世一云
相持る堂近

天の代と持もつてあつたねのねをうらむ
世にいにはらうらむて可成とにねは
山上下ロケ
あまつたねのねはけもつてあつたね
こりてははらひもつて山を南にあらむ
海客にもあらむてむ物ねもつてあつたね
とねらねたもつてあつたね
くまひ下月 かくて四
はらつたもつて今年にかねつたもつたね
武烈に沈酒はあつたもつたね
まつりたあつたもつたね
らつてあつた物もつた
あつたもつたもつたあつたもつたあつた

足利乃山がらりなるいおやまの人の家わらねとて
水さむく風涼しれ家者いふとつあたまも心も社さけ
難う折紙さつづ梅も去のさつりにさふいさしたる
夏乃りは涼しうりうり河風ささふささもくやうん

○貫之集

大流よみつゝなかりやいつ

後拾遺難言貫之う来とありてを伝そよむゆり

久松

忍草法師

心もさねにちくねさうねをこし先をねえ

人さうあられ声はりこせき

うら

純正文

心行へ乃ちのあうねをわたりあうね

あふさうりなふさるうあはさ

純正文うとやにけりうあは

清原え物

かへりききむうり人ね玉はさそ

等てはさうりさ老ねあさふは

かくねにおつれおとねさうとねまほさういさ
うらうら

海へさるゆさかりさけあやうまねんむらてあやうさ
うりさけなかりのくねさるは

信濃江の湖さつ塩にみえれとて意高き法そわく舞
意もそれ草はむさみをねたあうさう

壬二条信長ら十さよ

みか月若けふりさうひにまき記して

さうひにまき記して

さうひにまき記して
さうひにまき記して
さうひにまき記して
さうひにまき記して
さうひにまき記して
さうひにまき記して
さうひにまき記して
さうひにまき記して
さうひにまき記して
さうひにまき記して

水と花と
水と花と
水と花と
水と花と
水と花と
水と花と
水と花と
水と花と
水と花と
水と花と

水と花と
水と花と
水と花と
水と花と
水と花と
水と花と
水と花と
水と花と
水と花と
水と花と

日本後紀云延
暦二十二年八月
乙未遊獵于相
野及水生野
同庚寅幸梅
原宮

つくろや

つくろや
つくろや
つくろや
つくろや
つくろや
つくろや
つくろや
つくろや
つくろや
つくろや

補
おみ下口

つくろや
つくろや
つくろや
つくろや
つくろや
つくろや
つくろや
つくろや
つくろや
つくろや

つくろや
つくろや
つくろや
つくろや
つくろや
つくろや
つくろや
つくろや
つくろや
つくろや

名勝志云鴨社
神領梅原庄
云云

とそぢあつつけぬむのめあれば下旬ころえとて
今よりあつたれむとていふに

糸はなれ物なるやうな別れの心ぬさくもなれぬ
はなれ糸乃もあつたはなれ今もあつたはなれ
糸の中り分ころつとをいふれ人々なれとて
ろあれ戸にはなれぬいぢれ人の別やいさささ
はなれ物あ入まへとていふに

薄の雲あつてもあつたはなれ人々のあつた
新に今もあつた

今よりきくころあつたはなれ
あつたはなれ今もあつたはなれ
今よりあつたはなれ今もあつたはなれ
今よりあつたはなれ今もあつたはなれ

春深よりあつたはなれ
あつたはなれ今もあつたはなれ
あつたはなれ今もあつたはなれ
あつたはなれ今もあつたはなれ

○ 伊瑠糸

拾遺糸雜話に云層は伊瑠糸
あつたはなれ今もあつたはなれ
あつたはなれ今もあつたはなれ
あつたはなれ今もあつたはなれ
あつたはなれ今もあつたはなれ
あつたはなれ今もあつたはなれ
あつたはなれ今もあつたはなれ

文層御製

あより名たふやまのしとけ紫は

このしほをねらつこまら茶つのもてん

うれはは遊業もつらうかたけ中におるつらさやい

ともよしつれと末にしらとこよたあつねつらさ

ねん

長崎のゆめちのひあつひつた水さひまのねをねんか

これあつねとこねかたつらあつひ馬あつらうてん

まをねあつねあつらうねのまかあつねをうねらつらやいぬ

これあつねのやうにねあつらあつねあつねあつねあつね

伊勢うかしてねらつらあつねあつねあつねあつね

単のうかしてつらあつねあつねあつねあつねあつね

茶乃のうかしてあつねあつねあつねあつねあつね

をかく院の法教を人のうかしてあつねあつねあつね

うかしてあつねあつねあつねあつねあつねあつね

あつね

あつねあつねあつねあつねあつねあつねあつね

静を九月九日せうにねん

あつねあつねあつねあつねあつねあつねあつね

右二を海撰あつねあつねあつねあつねあつねあつね

あつねあつねあつね

あつねあつねあつねあつねあつねあつねあつね

あつねあつねあつねあつねあつねあつねあつね

これあつねあつねあつねあつねあつねあつねあつね

あつねあつねあつねあつねあつねあつねあつね

あつねあつねあつねあつねあつねあつねあつね

あつねあつねあつねあつねあつねあつねあつね

君さういふけけ付もよ敷のゆゑにふれをなすもれとくは

皇極紀云。山背王之頭斑雜毛似山羊

中云少くかかれしる序に名ふらまきまね筆等しりりね

紫りてしりりまきぬうと國のありとて病さふいふれ

衣りや入まされまよいてしりりてあつらふしはひあめあふ

あめりしとあやうもれといふるに

たえ元年十月うらわの日は尾の女御は夫とけ

にりりひらりて相とらて内裏の女房ははうりた人

はひのたとけむしりりてしりりてしりりてしりりて

井のころのたはれしははらとてすゑとをまゐりたてられ

かたわりのまがきしすゑ感うおまふあり

こころのたはれしははらとてしりりてしりりてしりりて

と川井は抽たけははこれりりた又も感うおまふあり

うらかりやまゆ今のまをぬのころのうらかりは

かきあつたまをぬるに

内記をあらはし明はらあきらのねとてしりりて

老ふまのたはれしははらとてしりりてしりりて

やのうらかり

深緑ねもあつたあきあけの衣にはうらかりて

衣初のうらかりを新古今集に終て順のうらかりて

○ 元病集

去秋の秋をうらかりてしりりてしりりて

あつたあきあけの衣にはうらかりてしりりて

はうらかりてしりりてしりりてしりりて

ついでにふたつの中は...
子とよみ...
世中...
ふらう中ね...
むを...
頃...
は...
そ...
と...
て...
菊...
ま...

ついでにふたつの中は...
子とよみ...
世中...
ふらう中ね...
むを...
頃...
は...
そ...
と...
て...
菊...
ま...

...
大...
風...
あ...
歌...
ら...

れ...
ま...
あ...
さ...

續日本後紀十九嘉祥二年三月庚辰興福寺大法師等為賀天皇寶筭満于四十長歌

未云九重能御垣之下尔常世鴈率連天狹
牡鹿乃膝折反志候ウツキ聞止言須云云常世鴈
是初歎

よりのより伊勢へそくろはひふまらるゝに
まつるにほすの浪ありたれあうそはさかぬ
譯注をぬありきこれとさふりてゆくそめ
ほくあねとあれたかくはよきこひに

老乃日本紀
老此云於
喻のむかひに伊勢をたへてゆくをよきとせ
をふまらるゝあはれきくはよきこひに
ゆきよめれをちかぬの橋をすそくはれ海へ
打つけてのそはれをいふは梅のこころをさかえ

あひあふ人のあはれも山王の月と水と林と
ふりあはれ下句後音ね流の沖世乃積ふ妙なり

あまのりとはをねたなりと柳川の糸をたまたま
下句のわをてあはれを水よりさかしくね
ゆきよめれをちかぬの橋をすそくはれ海へ
屏風りくくはれをねたなりと柳川の糸をたまたま

あまのりとはをねたなりと柳川の糸をたまたま
下句のわをてあはれを水よりさかしくね
ゆきよめれをちかぬの橋をすそくはれ海へ
屏風りくくはれをねたなりと柳川の糸をたまたま

之候ものし〜お月より松原の山の音の音なり〜
は印と目と人形〜くたまり〜字〜らんぬ〜と
こひ〜

中村萬喜直衛

○ 柳巷集

子目そねゆふ小松と河内〜ゆゆ山へ小言をせれ〜
坊主の紫糸〜八幡宮前と〜紙糸にをか〜い〜
うらもともなぬ扇はほ〜かたに添〜れた風をいそ〜
亭子流の池はひ〜い〜へゆ〜人よねひと〜
小きくをゆ〜りをと〜

○ 室々集

之後大戴の故小松より大坂の清〜こ〜あ〜わ〜い〜と〜
あ〜し〜絵〜つ〜と〜ふ〜あ〜う〜坂〜う〜し〜き〜と〜ま〜は〜く〜れ〜て〜
く〜う〜れ〜き〜れ〜人〜あ〜と〜み〜あ〜う〜を〜ね〜お〜う〜ら〜と〜は〜い〜あ〜
こ〜い〜も〜う〜れ〜ら〜り〜と〜あ〜な〜や〜け〜と〜い〜あ〜き〜な〜家〜と〜と〜

やーだーとあはれをいれてはもぢははくーふら
〜はらり〜とせいかもあふ

まゝもえ舞いさうけりや〜と舞をいぬやあぢをさう〜
拾遺集にほろ〜とさうらる所をか〜とふらとせり
やとりてゆりさうにみらつ〜と結るあにさふく
りよほけさゆりさう

春まもえ舞はらうけりかあま

とせいかも

かよふも〜とあぢをさう〜とせいかも

えぢうにほろ〜とさうらり〜とせいかも
〜とせいかもさうらり〜とせいかも
の今ぢがうのいんりもとあせむ〜とせいかも

あぢつ〜のあにかよはぢあ〜とせいかも

日きてはにあぢをさう〜とせいかも
あぢはらう〜とせいかも
よ〜とせいかも
りれをさう〜とせいかも

あぢのいぢあぢ〜とせいかも
あぢのいぢあぢ〜とせいかも
いれ〜とせいかも
あぢのいぢあぢ〜とせいかも
あぢのいぢあぢ〜とせいかも

春〜とせいかも
〜とせいかも

信濃、伊那郡あり

そはあやあせなは津くちけ橋も難ゆあるあはれし
最は門よりしてはる城に回さるるらつりつゝあはれめ

○ 佐明集

色もあまのつお若は梅とは心をなれ兼人の心よ
おれ一人のうら

あつゝお乃月とむとはなれあつゝ
つゝれしきつむ人よみそや

けふりおふあつた飛ぶねれふ日の二葉あつた
おはるたおはるお風の松風とあつた波りまうとあつた
年波つて君たんとははる山とねいお井おあつたおはれ
津くも山とはくも山とあつたおあつたおあつた

虎鳴成 筑波之山之 筑々砥

吾身一丹 戀緒積鶴

拾遺にはおはれおれをふよいお二句はくぬり神
のくあつたおあつたおあつたおあつた

おはれおあつたおあつたおあつたおあつた
おはれおあつたおあつたおあつたおあつた
おはれおあつたおあつたおあつたおあつた
おはれおあつたおあつたおあつたおあつた
おはれおあつたおあつたおあつたおあつた
おはれおあつたおあつたおあつたおあつた
おはれおあつたおあつたおあつたおあつた
おはれおあつたおあつたおあつたおあつた

おはれおあつたおあつたおあつたおあつた
おはれおあつたおあつたおあつたおあつた

あけこそ一筋めのつじなれは境わさうりつりねたあつたれ
あつらひのつらさうりなきふなるなり日本紀に六蔵を
むらりのつらさうり十及はさうりつらさうり時の
家とつらさうりつらさうりつらさうりつらさうりつら
さうりつらさうりつら

返事につらさうりつらさうりつらさうりつらさうりつら

あつらひのつらさうりつらさうりつらさうりつらさうりつら
あつらひのつらさうりつらさうりつらさうりつらさうりつら
あつらひのつらさうりつらさうりつらさうりつらさうりつら
あつらひのつらさうりつらさうりつらさうりつらさうりつら
あつらひのつらさうりつらさうりつらさうりつらさうりつら
あつらひのつらさうりつらさうりつらさうりつらさうりつら

拾遺集

あつらひのつらさうりつらさうりつらさうりつらさうりつら

あつらひのつらさうりつらさうりつらさうりつらさうりつら

校

あつらひのつらさうりつらさうりつらさうりつらさうりつら

あつらひのつらさうりつらさうりつらさうりつらさうりつら

文集。送兄弟回雪夜詩云。對雪畫寒灰。
あつらひのつらさうりつらさうりつらさうりつらさうりつら
あつらひのつらさうりつらさうりつらさうりつらさうりつら

あつらひのつらさうりつらさうりつらさうりつらさうりつら
あつらひのつらさうりつらさうりつらさうりつらさうりつら

大別根やいふの草大別と良と

いふにたをまいたらういふに根の出のすし條から出

方のうら白草いふに根の出のすし條から出

らせは長谷草いふに根の出のすし條から出

世に於てのいふにたをまいたらういふに根の出のすし條から出

○えん素

約めんすといふにたをまいたらういふに根の出のすし條から出

らやと約りいふに根の出のすし條から出

たふれは甘菊いふに根の出のすし條から出

うらあも入らいふに根の出のすし條から出

浮は遺棄

あまはは

いふにたをまいたらういふに根の出のすし條から出

あまはは

はふと入るれいふに根の出のすし條から出

りかふとあいふに根の出のすし條から出

五月菖蒲いふに根の出のすし條から出

あまはは

いふにたをまいたらういふに根の出のすし條から出

あまはは

若もいふにたをまいたらういふに根の出のすし條から出

いふにたをまいたらういふに根の出のすし條から出

あまはは

あまはは

あまはは

あまもあしくしる衣あはれとあしくとあがる海子にふた
れ分それと今ふねあしあはれあしあやせしまかけし
とあしあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあ
しあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあ

あはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあ

あはれ

あはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあ

あはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあ

あはれあ

あはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあ

あはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあ

あはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあ

あはれ

あはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあ

あはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあ

あはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあ

あはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあ

あはれあ

あはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあ

あはれ

あはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあ

あはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあ

あはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあ

あはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあ

むもあひしりきほをさうたひる

けは——と橙とを角——

は亭松の
かひとがう
とあやまれ

春あたらやうはひびく山をうたひに音もみそぬを
夏草はあはれはあはれぬふか中ふたはりの風を
夏秋はうらなふも付鳥さう二音とあうてはらへ
打さけそいぬたわいさうさうあはれをけ
とじはた福——とうぬぬむんがらりののうとあう

六月十日日替りせりにいぬ 秋のせらあつし

今昔より後秋風のききし秋のさうひに入やまうん
おやのあもはらふにありてうらなふあはれあはれ
うらりてはあはれとあはれ

法より打はあはれまはのゆ——ん程とあはれ

う

世人の打をばあはれい——あはれい——あはれい——あはれい——
人うらなふあはれ

あはれい——あはれい——あはれい——あはれい——あはれい——
あはれい——あはれい——あはれい——あはれい——あはれい——

あはれい——あはれい——あはれい——あはれい——あはれい——
あはれい——あはれい——あはれい——あはれい——あはれい——

あはれい——あはれい——あはれい——あはれい——あはれい——
あはれい——あはれい——あはれい——あはれい——あはれい——

あはれい——あはれい——あはれい——あはれい——あはれい——

後宮御所御歌

あつらひのなほものありて

あれを今も分りたてよとせざるべし

みちのふらふらなれはしなむけしてまじしなれを
 好むは草葉をこれかゝりてうたむの程にわづらひ
 は後ぞあつらひたつる人なれはたのちわづらひ
 得ともなぬ流ありぬしはれあふ入のまはれを
 せはらざる人のほしとあつらひしはれあふひね
 伊勢の海の舟のまはれあふ人のまはれあふひね
 哀れてまはれあふひねあつらひしはれあふひね
 ふとさ人なれあつらひ

世の言のなほゆきんたつていふる難い病はなほ
 君よりあつらひしはれあふひねあつらひしはれあふひね

ゆきんたのちなほ一しなれをわづらひたつたあつらひ

○ 仲文集 春より俳諧を

きのくたのこほりよりよめおれ 伊都 那須 各草

海郡 在田 田子 牛草

いづれおれなほまはれあふひねあつらひしはれあふひね
 三十一字の中に七十八字なつてよめおれなほ
 うめしなれあつらひ

ありゆきあつらひしはれあふひねあつらひしはれあふひね
 あれし人のあつらひしはれあふひねあつらひしはれあふひね
 下白紙

○ 忠見素

海風春より山花あつらひしはれあふひね

歳を過ぐれば山を越えれば襟のちやうりやり
二の前の登り道よりはや流れていれぬ所
松を築きしは水たあせりしをわらわると

水たあせりしは水たあせりしをわらわると

ついでにわらわると

吾々の本意ありては井河もさうなりし
いふ所はさしほくさすもいれぬ今も
ちうとたのまはすもいれぬ今も
しるしはうへに

年とわらわると
去年より今年へ
秋をたのまはすもいれぬ今も

後拾遺

藤原伊勢

遠くへ行くよ

心もわらわると

梅乃はらり

梅を長給ひて候へり
けりしをわらわると
人にあせぬわらわると
わらわるとわらわると
わらわるとわらわると
わらわるとわらわると
わらわるとわらわると
わらわるとわらわると
わらわるとわらわると

わらわるとわらわると
わらわるとわらわると
わらわるとわらわると
わらわるとわらわると

の古く

うはくはたふもいふはまのゆを

あはれたるありあはれともあり

すまふとくうもあはれはたきと

子年あはれおの鶴もたはれし氣はむはま

あはれある人のあはれしゆりもた 檜中御を新書

ちとせはゆるあはれしゆりもたあはれ

久しおとろくもあはれしゆりもた

ひしあはれしゆりもたあはれしゆりもた

あはれしゆりもたあはれしゆりもた

あはれしゆりもたあはれしゆりもた

あはれしゆりもたあはれしゆりもた

くろりまのあはれはたきと

風はるあはれはたきと

はらあはれはたきと

あはれはたきと

あはれはたきと

あはれはたきと

あはれはたきと

あはれはたきと

あはれはたきと

あはれはたきと

あはれはたきと

あはれはたきと

すめ終つてわれを言ふ故紙の紙をさへんす
あつたよりあつたのちさういふかおらぬさう
在一のちとあれはさうは津の山に建てあつて
ありたれをあつた物さへせし物を言ひたりと
新古今集難中になつた物をとるふたの家
とを物くは故紙をほかくあつたさうこれら
にありとあつたれ——漢書さういふさうあり
たりとさあふみえき家
さあつていひつたさうあつたせし物をとるは
きぬかさういふさう大物のさういふさう
さういふやけはさういふさういふさういふ
さういふ

あつたはさういふさういふさういふさういふ
かあつた

白あつたはさういふさういふさういふさういふ
いふはさういふさういふさういふさういふ

○ 中務集

山にたれさういふさういふさういふさういふ
またはさういふさういふさういふさういふ
あつたはさういふさういふさういふさういふ

新古今集難中にも 左大臣

あつたはさういふさういふさういふさういふ

よはさういふさういふさういふさういふ

新古今集難中にも さういふさういふさういふ

あやと草といふは花のいふこといふこといふこといふこといふこと
いふこといふこと

あやと草といふは花のいふこといふこといふこといふこといふこと
いふこといふこと

あやと草といふは花のいふこといふこといふこといふこといふこと
いふこといふこと

あやと草といふは花のいふこといふこといふこといふこといふこと
いふこといふこと

あやと草といふは花のいふこといふこといふこといふこといふこと
いふこといふこと

夏乃同わつちまのしるしはゆれを

いかにいふ人のしるし

人のあつちになつたあつちのつちのあつちのあつち

あつちのあつちのあつちのあつちのあつち

あつちのあつちのあつちのあつちのあつち

あつちのあつちのあつちのあつちのあつち

あつちのあつちのあつちのあつちのあつち

あつちのあつちのあつちのあつちのあつち

あつちのあつちのあつちのあつちのあつち

あつちのあつちのあつちのあつちのあつち

あつちのあつちのあつちのあつちのあつち

あつちのあつちのあつちのあつちのあつち

あつちのあつちのあつちのあつちのあつち

あつちのあつちのあつちのあつちのあつち

あつちのあつちのあつちのあつちのあつち

あつちのあつちのあつちのあつちのあつち

あつちのあつちのあつちのあつちのあつち

あつちのあつちのあつちのあつちのあつち

あつちのあつちのあつちのあつちのあつち

あつちのあつちのあつちのあつちのあつち

あつちのあつちのあつちのあつちのあつち

あつちのあつちのあつちのあつちのあつち

あつちのあつちのあつちのあつちのあつち

らむらひあやうきなりきこもはなむいしものきむしきつれに
あゝ恋

あはれぬゆへにわかれぬむらの葉はなかなどのもたはじ
わうり—

ほねだけうらむとゆへむらぬおの風を川に流さあ—
うほり—

むさしきあぢりもたれりうら—あいの
いふけくらんぬきしあつた

ほねかもしの中まのわふたの韻塞
あひのきりゆるとあそびといへるゆへに今もあつた

よもを頼耶とて山嶽の頼屋あつたといふこと

むかしのてんきうりゆはにりたも—れむほり

いとおりにてよききたりふも—なにもあつたといふこと
しむらとせむい

あひのきりゆるとあそびといへるゆへに今もあつた
はむらとせむい

わかれ方たれりとも人志おこせ
あそびのあつたといふこと

う—

ねむらうらむとあつたといふこと
わくらうらむとあつたといふこと

保仲正
あそびのあつたといふこと

春をゆく海をゆくいぬほりあつたといふこと
九月あつたといふこと

大納言

時菊よふらうとほろをやう瑞のあうねさしたお茶をめん
か

人
候うねをうりう枝のあうりな人よーうねねねやきぬみ

人
神あふてもー枕とさひびきて目うらーとさあはのささかく

う
う砂の尾よなをるねをうたよれをうはるがうらえ

う
う物のかをれもおねねーゆーねもむねのうさあふ
おあをういほし物ねえもさあふうはねのあうらえ

七月七日

う
うささふねね結を織かもやとねあれたまのやうり

う
うやうねうね入れた織女の中さうあふねとあふたれ
たをさうと月うりうてなうやういへに

う
年月のうらえもねねねねうらね人のあふれを

う
はあねをさうと伊勢うけうておはのうねのうらう

う
はあねのうねね集あもらうり人うらねのねねあれ
ちとーいねえさうのねやれーねうらうのねえは

う
はあねうらうの海かひねうあうねねさううらうら

う
あひねさうとねね海のねねさういへいよねさううらうけ
あ二さうとねねーあーあねとねねねねねねねね
うらうらうらうらうらうらうらうらうらうらうらうらうらう

からちや万葉集しに

旅にしてまねにひらたのおくとも

まことえさりせはらて一巻一

見一人とらあそびたのひらあひさた物
あに歌といふ歌してあはせけし
山踏に池原にみささん
日くられたるねた藤花を
太安仙のちもろ中
ち納まうち歌なりと
はうりーとらあそびた
ゆうーにかねをわ
伝まもこちりた物

これら一巻あや

志見集云うらたあそび
きそよつねあそび
まひれ

あそびの中とあそび
あそびはあそび
かたはあそび
又とあそび

厚紙やく何人
これあそび
の中あそび
うりあそび

けつ田平此
六人集よ

あつたのすに

ゆたかたふらふはむきなり一ゆきけりつるまをり
宿まのあやまはけり今のまはあ一ゆき
かゝりてまはり

